



第 3 5 号
平成十一年
(1999)
4月15日発行
(年4回発行)

曲阜の旅

東明雅

十二・三才の頃、昔中国に孔子様という聖人が居られたと教えられ、それ以後、凡そ七十年、どっぷりとその教の影響の下に生きて来た。いわば私の魂の源泉は孔子であった。

「中庸の徳たる、それ至れるかな」とか、「吾、日に三度吾が身を省みる」とか、「死生命あり、富貴、天にあり」とか、今でも処世のモットーとしている論語の章句は数多い。その孔子の生まれた所を訪ねて、中国山東省曲阜の闕里賓舎に着いたのは四月五日の午過であった。黒瓦の重厚な賓舎の表玄関には、横書きの扁額が掲げられ「有朋自遠方来不亦楽乎」と読めるのがまず嬉しい。

翌日は終日三孔の見学、三孔とは孔林(孔子の墓所)、孔府(孔子の家宅)、孔廟(孔子の壺を祀るところ)をさす。私はいくら孔子が聖人と言っても、身分は地方国家の宰相

ノラス、家も墓も廟も大した事はあるまいと考えていたが、流石、三つとも世界文化遺産に指定されているだけあって、その規模の大きさ、建物の壮麗さ、全く想像以上であった。たとえば孔廟は広さ二〇ヘクタール。本殿の大成殿は高さ三二メートル、間口五〇メートルの堂々たる建築物で、その巨大な軒を二十八本の石柱が支えている。そのなかの正面の十本には、宝珠を弄ぶ竜の石彫がほどこされ、これは中国石彫芸術の最高傑作に数えられている。私は二十年前、ギリシャ、アテネのパルテノンで見た大理石の柱廊を思い出した。黄色な屋根瓦と赤い壁、これは帝王の住居にのみ許される色だそうであるが、相映えてすばらしい風格の景観を作り出している。

曲阜の市の名物の一つは、印刻・印材屋の多いことである。市全体で何軒あるのであるうか、宿舎の前の通りなど、軒ごとに印材を並べ、「五分間で彫り上げます」と書いた紙を貼って客を呼んでいる。私は中国に旅行する旅に印章を彫って貰うのを楽しみにしているが、実は今度も中国に着いた当日、青島のホテルの売店で格好の印材を見つけ、翌朝七時に「猫養庵」と彫った関防印を受け取っていたのである。これは流石にホテルの下請、彫代として一字二十元(約三〇〇円)を取っただけに、見事な出来上りであった。私はだから曲阜では別に必ずしも印章を作るつもりはなかったのであるが、元々好きにだけに、

「印を出て散歩しようとする時、すぐさま真前の印刻屋につかまってしまった。値段のことを言うと賤しいが、前日の印材とほぼ似たようなものが三分の一以下、彫代は何字でもただ、待っている間に彫ってさし上げますという。人のよさそうなお内儀さんと娘らしい小姐が熱心にすすめるので、一応、条件を紙に書いて確約して注文した。すると、隣の家から三十前の実直そうな男が、彫刻刀を一本持って現われ、私の差し出した「猫養庵」という名前がよほど珍しくおかしかったのか、家中大笑いになったが、その笑いが収まるか収まらぬかに、男はさっさと彫り上げてしまった。もちろん、出来栄はお粗末であったが、私はあらかじめ予期していた事だけに、腹もたたず、旅の楽しい思い出の一つとなった。

今後、中国を旅される方の参考にと、こんな話も書き記したのであるが、実はもう一つ、今度の旅で、同行者の中に、三十年前一座したことのあった三村占風氏が交っておられたことが、曲阜から青島に帰る旅路の終りに、偶然のことから判明し、お互いに奇遇を喜びあった次第であった。

花杏異国で故知に邂逅ひ

明雅

鉦鼓の響のどかなる舞

占風

紙風船嬰はすやすやと睡るらん

光男

快心の作 版画彫り上げ

郁子

立机のこと

緑華亭 坂本 孝子

平成十一年二月十七日、新宿区のKDDホテルストラータに於て、猫養会の第三回立机式が賑々しく挙行されました。

未茂れ翁ゆかりの松五本 明雅

当日の祝賀参会者は八十数名。東明雅先生より新しく庵号を頂き、立机を許されたのは左の五名であります。

唐猫庵 大窪瑞枝 冬霞庵 上月淳子

臥猫庵 原田千町 袖菊亭 豊田好敏

卯遊庵 蒲原志げ子

これで現在猫養会には十三名の宗匠が、名を連ねることになりました。

日本の伝承芸能の中で、邦楽や日本舞踊では技芸上達に伴い、俗に「名取り」と言つてその流儀独特の芸名を頂くようになります。華道・茶道では庵号と師範の免状、能楽などでは師範職分の資格・免状を授けられると、独立して弟子を取ることが許されるしきたりとなつていくようです。中でもその免状を与える家元は、多くの場合世襲制であり、それによつて数々のドラマが語り伝えられたりしております。

連句界における宗匠立机とはどのような意味を持つものなのでしょう。

中公新書『連句入門』東明雅著の扉の挿絵に、蕉村の描いた「俳諧興行の図」がありま

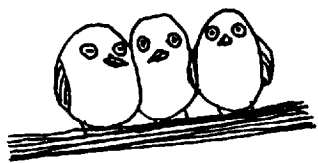
す。翁のような宗匠に見守られながら執筆が文台の前で筆を立て、これに向かい合つて二人の連衆、後ろに小さく描かれているのは婦人か童でしょうか。あの頃は正式俳諧でなくともこんな風に文台を使つていたのですね。また更に遠き世の連歌や歌合せの判者達にも勿論文台は欠かせなかつた筈。ましてや連歌や俳諧を神仏に捧げる場合には、供物を料理する俎とも器ともなるのです。文台の前に座する執筆は作法に則り、一座の詩心を上手に刺激し、新鮮なる言葉という素材を料理し、工夫を凝らした盛り付けの腕を奮わなければなりません。その腕前が師匠に認められたとき立机のお許しが出るわけです。きつと下俳諧など無く、時間はかかってもすべて即興で首尾したことでしょう。

かつて、ACC連句教室で三年間受講した者にはお免状が頂けるとのご沙汰がありました。普通なら「三年間の連句講座を修了したことを証します」と言うような内容なのでしようが、実際に頂いたのは、明雅先生直筆で奉書に認められた「伝道書」。芭蕉翁以来、

「北枝・希因・蘭更・蒼虬・芹舎・凌冬・芦丈」と蕉風に連なる先人達の名の後に、明雅そして私の名が記されており、びっくりしてしまいました。これは信州大学教授でいら

した当時、根津芦丈師より連句というものを伝授され、これこそ生涯をかける道と決意された明雅先生の熱情の表現に他ならないと思

いました。以後連句教室の卒業生、即ち「伝道書」を頂いた猫養会同人は数を殖やし、昨平成十年六月現在七十二名、また一般会員は一六九名となりました。この中に十三名の宗匠が含まれているのです。また立机のお許しを待つまでもなくすでに連衆としても捌としても力量をそなえ、指導的活動をしている方々もあります。しからば頂いた文台をただの勲章に終わらせないために、今後何を志したらいののでしょうか。今回明雅先生に直接伺つた訳ではありませんが、一つには益々の連句啓蒙に尽力すること。次に、時代性を反映しながらも放埒な自己表現に片寄らず、変化に富んだ香り高い作品を目指すこと。芭蕉没後「蕉風に帰れ」という言葉がいくたび叫ばれたことか。そしてもう一つ、これからは明雅先生のお考えを親しく伺いながら、猫養会の運営にも積極的に協力し、会員の意見や希望を吸い上げて柔軟性のある開かれた会に育ててゆくよう希望したいと思つております。



三たび立機式に招かれて

北陽社 内田 素舟

五十年近く北陽社に在籍している私は、今まで社の立機式を七回ほど見てきたが、中身は同人の祝吟披露、正式俳諧興行、祝宴と毎回平凡でお定まりの形であった。

今回、三たび猫養会の立機式に招待されて思うことは、私どもとは較べものにならない華やかさと、格調の高いことは勿論であるが、立機式の進行が連句一卷の流れである、序破急理論の如く進められているからである。

特に連台詞（つらね）、長唄（前回は義太夫もあつたと思う）と続く頃は「急」を味わう一と時であり、厳かな式典の中にもこのような一と駒があつて、微笑ましい限りであった。猫養会の方々には俳諧はもとより、多芸に秀でた方ばかりで、これを見事に演出された実行委員の力量に驚くばかりである。

伝統を重んじ、立機式を行っている結社もあろうかと思うが、猫養会の、新しきもの、古典的なものをも交えて運ばれた立機式は、俳諧随一といっても過言ではないと思う。文台の作者阿部氏（编者註／北陽社）も晴れの式場での授与に感銘一入と言っており、私も東明雅先生との御縁により、三たび立機式に招かれ只管俳諧人としての幸せを噛みしめているところである。

お江戸の粋にもふれ

桃雅会 武村 利子

平成十一年二月十七日、猫養会新五宗匠立機式のお祝いにと、桃雅会代表の壽子さまと名古屋より新大久保の会場に直行すべく、朝早くひかり号に乘車。道中代表の楽しい話に聞き入り、「今日は楽勝、早く会場に入れる」と思いきや、熱海の辺りで長々とひかり号、のぞみ号他が列をなしていた。

待つこと一時間弱。楽天的な二人連れも少々心配になりかけた時、ひかり号は静々と動きました。ここで深呼吸を大きく一つ……この度の五新宗匠へ心よりお喜びを申し上げます。

立機文集の「松五本」は真的に射ていると感じ入りました。「色変えぬ松」のごとく新世紀に向けての御活躍お祈り致します。桃雅会は名古屋の地より代表をはじめいつも東の空を見つめております。

猫養会の方々は何事にも生半可で済まない深い芸事をお持ちですので、「つらね」における「白浪五人男・女」は拝見していても、音色も立姿も華ある舞台でした。次回の立機式にも出席致したく楽しみにお待ちしております。

立機式をお手伝いして

鎌倉うらら会 田村 満子

この度は立机なさいました皆様誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。さて鎌倉うらら会が立機式のお手伝いをさせて頂くようになりまして、今回が三回目でございます。前二回の折には芭蕉記念館という限られた場所でしたので、何分狭く、そのため荷物のお預かりに、お弁当配りに苦慮したことを覚えております。三度目の正直と申しましうか、今回もうらら会あげてのお手伝いということで、受付は？ 下足は？

お荷物の預かりは？ と気を回しましたが、今回はホテルと伺ってホッと胸をなで下ろしました。やはりホテルの会場は広く、思うように働くことができました。すべてのことがスムーズに運ばれ、私たちには何物にも替えたい喜びでございました。しかし、お越し下さいました方々のご満足を得られましたかどうか？

三味線の音を聞きながら、願わくば一度ゆつくりと立機式を最初から最後まで拝見できましたらと思うのは私たちの愚痴というものでございませうか。

最後になりましたが、うらら会から連句の宗匠が出ましたことは何よりの喜びでございます。

平成十一年 猫養会立機式及び祝宴次第

(敬称略)

二十韻「松五本」

東 明雅 捌

二十韻「祝酒」

内田 麻子 捌

来賓接待 内田麻子
受付責任 中田あかり
進行係 佛淵健悟

開会の辞

同

会長挨拶

東 明雅

新宗匠の紹介

下鉢清子

免状並びに文台の授与

東 明雅

会長への謝辞

大窪瑞枝

新宗匠への祝辞

式田和子

祝吟披露

内田素舟

祝電披露

坂本孝子

来賓祝辞

副島久美子

連句協会理事長

土屋実郎

新庄北陽社

阿部 太

新宗匠に花束、記念品贈呈

会員代表

猫養会への謝辞

新宗匠代表

連台詞(つらね)

上月淳子

記念撮影

高橋豊美

お祝いの長唄

稀音家六久美代社中

新宗匠退席

(休憩約二十分)

連句興行/作品披露

閉会の辞

市野沢弘子

以上

めでたさや花それぞれに松五本

明雅

落味嗜をさかなに酌まむ祝酒

麻子

文台新長閑なる庵

素舟

池のあたりに飛べる初蝶

智恵

向う付揃ひの目張手に入れて

実郎

入学の制服やうやう整ひて

和代

パジエロを飛ばし家族サービス

一笠

ビデオカメラをしっかりと持つ

美恵

サーファーが取りそこなひし月の船

良子

噴煙の東に流れ阿蘇の月

登代子

羅を着てお酒つく人

紅舟

牧水の忌のけふも旅行く

豊美

職を退き浮名を流す四畳半

素

手を取りて二人隠るる葦の陰

登

一盗二婢が大はやりなり

雅

身籠り告ぐる碧眼の嫁

代

向井さん見事活した無重力

笠

聖母子のアイコンチャペルにくすみあり

恵

猫の着地に拍手喝采

郎

尺取虫の計る正確

同

新しきまはり舞台に見得を切る

紅

汗かきて大臣官の原稿を

登

南天の実のゆらりゆらりと

良

舌戦好調野村阪神

美

J・A・L・P・A・C・Kジェット機に乗り神の旅

雅

聞耳をピンと立てたる黒き猫

恵

富士を背にして契り合ふ愛

素

御職張る妓の炭をつぐ夜

美

念願の帰化叶ひたる月皓々と

郎

凍月の古刹でききし心中譚

恵

鳥も笑ふ今の案山子は

笠

ダカールラリーの応援に発つ

代

赤青黄芸術祭の大看板

良

バスポート空白のまま夢も果て

登

軽き鼻歌事なせし後

紅

ぬらりひよん来て家に居座る

美

花匂ふ万世不易句座の宴

素

三味の音の響く下町花の舞ひ

登

とろりの夢をさます蝶々

執筆

巢立の鳥にパン屑を撒く

代

平成十一年二月十七日

於 新宿区「ホテルストラータ」

連衆 内田素舟 土屋実郎 阿部一笠

本屋良子 筒井紅舟

平成十一年二月十七日

於 新宿区「ホテルストラータ」

連衆 須田智恵 長崎和代 山口美恵

竹田登代子 高橋豊美

二十韻「松五本」

田村 満子 捌

二十韻「紅白の梅」

橋野 代々子 捌

二十韻「二見ヶ浦」

八角 澄子 捌

咲き初めし梅も混りて松五本

満子

紅白の梅匂やかに五枝かな

代々子

寒明や二見ヶ浦の波頭

澄子

うららの窓にかしこまる猫

志げ子

初鶯の透きとほる声

郁子

囀しきり防風の松

ふみ

フティックに春のシヨールを選ぶらん

達子

縄電車巡る広間ののどけて

健悟

しゃきしゃきと酢味噌の獨活の歯ざはりに

好敏

レンガ通りに若者の群

秀樹

新住所録パソコンに入れ

文子

方程式を解きし父上

碧

生麦酒ここまで月のまんまるく

哲

着膨れし僧の見上ぐる堂の月

淑代

山裾をジヨキング仲間夏の月

泉子

自慢の素足惜し気なく見せ

正子

誘はるるままにとろりと夢心地

郁

知りながら求めて墜ちた修羅地獄

碧

地獄からおいでおいでと恋しひと

哲

宙返りして飛ぶブーメラン

淑

人材銀行部長スカウト

敏

東司にしばし僧の妄想

達

予備選挙には隠し球出す

文

久しぶり雨に潤ふ石畳

敏

ホラ吹き男都知事に立候補

げ

サボ買つてホームバーバー楽しまん

文

顔見世狂言向ふうならず

み

嘴太鴉つつく生ゴミ

達

海霧つつむ桑港の橋くぐる船

淑

年玉の袋あれこれ買ひ揃へ

泉

賑の三季を忘れ山眠る

正

カラテ修行の続く弟

悟

寝たふりをしてすねる老猫

淑

飯は炊けたかおでん煮えたか

げ

ふた饅はこれに限ると長き列

文

本妻といふ言葉こそ不思議なれ

泉

棟梁の昔の情婦はおかみさん

樹

二股かける恋のやや寒

郁

バツイチバツニ競ふタレント

み

コキユにされて泣きつ笑ひつ

げ

弓張を証人として永遠誓ふ

悟

帰しともなきを帰して朝月夜

淑

尖塔に突きささりたる赤き月

樹

句を散らし書き逆髪祭

淑

鬼の捨子と愚痴の枅酒

敏

車椅子止めちつち蝉聞く

正

傘寿過ぎまた取り直すバスボート

郁

秋深し「明治」みつけた蔵の中

泉

亡き友を忍ぶしぐさのそぞろ寒

樹

古りし筆筒にうすき瑕あと

文

フルブライトで留学の友

碧

場外試合 野村・長嶋

正

花見鯛大吟醸を酌み交し

郁

前庭は花のオランジュ美術展

敏

暁の力みなぎる花大樹

達

鈴を鳴らして子猫寄る膝

文

蛙いづこへめかり時なり

碧

蛙のつそり天下泰平

哲

鈴を鳴らして子猫寄る膝

文

蛙いづこへめかり時なり

碧

平成十一年二月十七日

於 新宿区「ホテルストラータ」

連衆 卯遊庵志げ子 篠原達子 青木秀樹

中川哲 小原正子

平成十一年二月十七日

於 新宿区「ホテルストラータ」

連衆 東郁子 佛淵健悟 橋文子

浅賀淑代

平成十一年二月十七日

於 新宿区「ホテルストラータ」

連衆 袖菊亭好敏 中村ふみ 松本碧

青木泉子 町淑子

二十韻「連ねめでたく」 本田 弥生 捌

二十韻「ゆるぎなし」 峯田 政志 捌

二十韻「春嶺」 八代 嫺 捌

春や春連ねめでたく勢揃

紅白梅もふむ朗声

切通し展ける海のかぎろひて

村の歴史を字ぶ子供ら

マグナケア「すばる」でのぞく夏の月路子

君は素肌に夜光虫つけ

逃避行新聞種の五段抜き

賞には縁の遠き人なり

ジャイアンツ巨足が罷る閻魔の府

保険をかけるホールインワン

寒の墨斜めに減りて安定す

寝酒にしよう とろり 吟醸

湯治をば言ひわけにして未亡人

触れる手と手に走る電流

飛火野の起伏をなぞる望の月

鹿鳴くこゑを夢に聴きをり

同窓会かがし盗みしこともあり

「ヨタ」の単位は零が二十四

城下町東西南北花の鐘

結び針魚に注ぐお清汁

*万一億一兆一二十四桁目

平成十一年二月十七日

於 新宿区「ホテルストラータ」

連衆 加藤道子 延平いくと 佐々木有子

倉本路子

春日和五岳揃ひてゆるぎなし

香も凛々と顛てる野の梅

浅刺飯すこし味濃く炊くならん

人溢れるるキャンパスの昼

水球部かけ声高く月見えて

夫婦道輪の並びたる隅

風俗の店に通ぜぬ振興券

かくも淋しき閨のひろさよ

もつれたるままで切り捨て糸車

いたづら盛り兄弟の猫

凧の鳶の頭はクリスチャン

どんどの燂に茶碗酒酌む

恋といふ河の流れに身を任せ

けれど迂闊に夫を選べず

シテ狂ひ月差しきたる能楽堂

師匠の入れ歯すすぐうそ寒

いまに見ろ鬼の捨子の底力

ペンペのタイヤ路に吸ひつき

陸奥ヘカメラ仲間と花の旅

たがやしてまた夢に畑打つ

平成十一年二月十七日

於 新宿区「ホテルストラータ」

連衆 坂本孝子 金久保淑子 小泉義重

紺野千寿子

春嶺のその名したしき立机かな

めでたさに咲く梅のうす紅

高速路雉親子の横切りて

髪のりぼんのゆれゆれてゐる

大鍋に自慢のカレー夏の月

あばずれっぽく誘ふ香水

捨てないでおひやくと参りしたるゆる

同床異夢の派閥連合

昼九夜八船七馬六酒はよき

砂漠の民のゆつたりと胡座

かけひきが下手で絨毯買はさるる

鎌鼬めくネット犯罪

念願の窯場訪ぬるひとり旅

秋の芝居の仁左衛門好き

月光を浴びて狂女の蒼く舞ひ

怨念抱きて蛇穴に入る

土笛の風に乗る来るトスカーナ

店先で挽くコーヒーの豆

思はざる花の盛りに会ふことよ

笹の葉敷きて栄螺常節

* 酒の注ぎ方

平成十一年二月十七日

於 新宿区「ホテルストラータ」

連衆 臥猫庵千町 染谷佳之 内田公子

和田順子 中野昌子

歌仙「四温かな」 上月淳子 捌

ゆつたりと汐差す河口四温かな 淳子

臘梅の香をのせてくる風 健悟

金糸魚の色美しく煮上がりて 志世子

夕ベストリーを新品に替へ 代々子

子等連れてランドタワーの月を見に 時子

電腦機器の鈴虫の声 悟

剽軽な手振り腰付き阿波踊 代

いつも高嶺の恋を争ふ 悟

仲人を立てぬ結婚流行りだし 代

進まぬ食にわけを問はれぬ 世

落語家の扇自在にもの言ひて 代

歪んだ月の浮かぶつゆ明 悟

大物が出払ふルーブル美術館 時

心霊術を使ふ捜査も 悟

格安の航空券のよく売れて 世

いばって坐る禁煙の席 時

ギヤラリーの花の袂に一打消え 代

巢立ちの雛に向けるフォーカス 悟

春の風邪やうやく癒えて庭掃除 代

言問だんごに長き列出来 世

海峽に不穩の輩出沒し 同

耳無し壺のどれも逆様 時

狂ほしきよされよされの雪の原 悟

シャギーを入れていよよ艶めき 代

通帳は添伏しの間も放さざる 悟

ぼっくり寺へまたも誘はれ 同

二合半の酒に足らひて長寿眉 代

変身願望小植ひと振り 時

馬を御し月の荒野を馳せる夢 代

あやとりの舟漕き出だす秋 世

西鶴忌いつしか雨となりてをり 同

パン焼く匂ひこもる家中 時

オルゴール求める旅もお終ひに 悟

横文字彫りし石の表札 時

花の昼異国に老いし宣教師 淳

雲眺めつつ揺らすふらここ 世

平成十一年一月二十日 江東区芭蕉記念館 代

連衆 佛洩健悟 秋山志世子 橋野代々子 時

梶井時子 同

土産ぶらさげ父の来るらん 同

円・ユーロ・ドルの連立て仰ぐ月 町

釜の口あきどうとでもなれ 二

地芝居のお前判官おら弁慶 町

里山ひとつ越せば湯の宿 二

パソコンに花の情報呼び出して 壽

マイケル・ジョーダン退いてうららか二 紀

ぶらんこに乗る人も無き遊園地 同

牧羊犬が合図待ちをり 町

上申の案は愚策と注意され 壽

派遣の時給下がる一方 千

糖尿効くと言はれて納豆汁 二

狂女叫びぬ雪しまく中 同

塔の中ふたりをつなぐ鎖の輪 町

銀色の鍵鳩が運んで 千

キャッチャーのサイン盗んで叩かれて 二

賞味期限が切れたもの食ひ 壽

月蒼し四重奏団前庭に 二

吟遊詩人ローマ秋風 壽

歌仙「龍神は」 下鉢清子 捌

龍神は水吐きやまず初むかし 清子

鈴ちりちりと受けし破魔弓 千町

オードブル踏の臺など添へてみて 壽子

遠足前夜眠れない児等 千寿子

春障子月の光の明るかり 佐紀子

TVが講師棋譜の勉強 慎二

富本銭出でて飛鳥のにきはひぬ 町

単車の列は茶髪金髪 壽

二人酒好いた同志の気安さに 千

格気が化して守宮とはなる 町

羅が出しつ放しの衣紋掛 千

土産ぶらさげ父の来るらん 同

円・ユーロ・ドルの連立て仰ぐ月 町

釜の口あきどうとでもなれ 二

地芝居のお前判官おら弁慶 町

里山ひとつ越せば湯の宿 二

パソコンに花の情報呼び出して 壽

マイケル・ジョーダン退いてうららか二 紀

ぶらんこに乗る人も無き遊園地 同

牧羊犬が合図待ちをり 町

上申の案は愚策と注意され 壽

派遣の時給下がる一方 千

糖尿効くと言はれて納豆汁 二

狂女叫びぬ雪しまく中 同

塔の中ふたりをつなぐ鎖の輪 町

銀色の鍵鳩が運んで 千

キャッチャーのサイン盗んで叩かれて 二

賞味期限が切れたもの食ひ 壽

月蒼し四重奏団前庭に 二

吟遊詩人ローマ秋風 壽

歌仙「お山焼」

副島 久美子 捌

お山焼どよめく中に吾もをり

久美子

繭玉高くかざす少年

弥生

曲家の大黒柱磨くらん

利子

行く先々に猫が寝そべる

水壺

ふんはりと水に泳ぎし春の月

芙紗

揺るともなく揺るるぶらんこ

壺

勝鶏をむんずと掴み横抱きに

生

毘にはまったキヤリアウーマン

利

泣くことを恋の手管と心得て

紗

辞書で探せど見つからぬ文字

利

朝まだき霧にさまよふ影法師

紗

宇宙より見る月は何色

生

赤い羽根万札出して重ね挿す

壺

スピード・スマップアイドルの歌手

生

ボキヤ貧と言はれ頑張る我が首相

利

夢のくづし字大書してみる

壺

玉しだれ昇り花火に息をのみ

利

行水の兎に鹽小さき

紗

落研で会得の芸が身を助け

利

VIP案内京都洛北

生

銅鏡の出でし古墳の土乾く

同

座禅の痺れ爪先の凍て

同

雪女声をかけたがすいと消え

同

煙の出ないタバコ売り出し

生

くつついて政財官の三すくみ

壺

ごきぶりさんにはつたりと逢ひ

利

髭男港を離れそれつきり

沙

移り香肌に燃える情念

利

影しるく月宮殿の宴とも

壺

糸瓜の水の滴れる塚

利

錆鮎と地酒を提げて旧き友

同

聖と俗とを行きつ戻りつ

生

本日もバカチヨンカメラよく売れて

壺

優勝たのむ野村監督

利

飛花落花身に纏ひ付く風のなか

久

誰も気付かぬ初めての虹

紗

平成十一年一月二十日 江東区芭蕉記念館

連衆 副島久美子 本田弥生 武村利子

今宮水壺 根津芙紗

歌仙「初富士」

中田 あかり 捌

初富士の裏を仰げる盆地かな

あかり

卯杖を突き下る峠路

徒司

大広間桜こちてふ吹き抜けて

豊美

新社員達膝を揃へる

麻子

朧月帰宅の影もやはらかく

一恵

餌付の野良猫裾にからまり

子

コンピューター買へどわからぬマニュアル本

恵

合成音の女性コーラス

美

崩し字の読めぬ恋文抽出に

子

蓮見茶屋にて束の間の愛

美

お小遣そと貰って蟻地獄

子

話の合はぬ孫と婆様

司

芒野をバス過ぎ残る蒼き月

同

露霜つきし大名の墓

恵

きりたんぼ鍋に溶けかけ揃ひ居り

子

音楽酒酌み踊り出す奴

子

花繚乱旧制高校紅枝垂

子

光る水面に春蟬の鳴く

美

何となく朝寝の夢を思ひ出し

恵

ミロの絵に見ゆ丸と三角

子

大地震煉瓦の塀の焼け斑ら

恵

元宮様は郷土史家とか

司

熊狩りのまたぎの儀式伝承す

美

炭燃す窯の煙白々

子

たくましき茶髪のバイト雇ひ入れ

恵

AM一時コンビニで逢ふ

美

二十歳母となる日のしなやかに

子

吉凶狙ふ鬼の報道

恵

宇佐祭生けるを放つ月の川

美

錦木眩し引き揚げのとき

恵

今更に健康食のとろろ汁

子

競馬麻雀癡ままくる友

恵

浮かれつつ歩めば溝に落ちこんで

司

壁にかかりし論語扁額

恵

月出でて花の彩ふと淡くなり

り

草餅提げて遠来の客

美

平成十年一月二十日 於 江東区芭蕉記念館

連衆 杉内徒司 高橋豊美 内田麻子

山崎一恵

英語連句の試み 花鳥風月(9)

浅賀淑代

花の頃は決まって冷えるものだと、今年も「花冷え」(英語では"blossom cool"と訳されます)という美しい季語に領いたことでした。花曇りや花冷えのある日本の「花時」(blossom time)を海の方こうの人々はどうか想像するのだろうか、と思いをめぐらしつつ春のハイクをご紹介します。

Cherry blossom cloud

suddenly blowing away

leaving high blue skies

James Kirkup

(花散ってたちまち空の青さかな)

"This is the spring wind!"

says chimney

to chimney.

Lee J. Richmond

(煙突が煙突に言ふ「春風だ」)

(以上、佐藤和夫氏訳。同氏著、ふらんす堂刊『HAIKUの鑑賞』に所収。)

共に、現代のハイク詩人の句。春の色や句が届いてきますね。

英語のハイクって？韻を踏むのですか？

・英語句の試みをなどいいながら、私自身、曖昧なことばかりですが、ハイクとは、分類上は無韻詩。三行、5・7・5音節(例)

えば、上掲のKirkup氏の句はその模範)が基本、つまりハイクの伝統的な型。(しかし、最近はそのに捕われない句が大半。)日本語のような成熟した季語はないものの、季節感があり、また、いわゆるハイク・モーメント(俳句的瞬間)のある詩。・・・大ざっぱですが、このように把握できそうです。

さて、レンクの場合。例えば5・7・5音節の三行詩(短句は7・7の二行)が鎖のようにつながって行くわけですから、コンパクトな日本語の連句と比べ、字面だけでも重たいといえは重たいものです。そこで、2・3・2音節を長句の目安(短句は3・3)とする考えもグループによってはあります。

付句に必要な情報(言葉)を盛り、また、(膨張して成り立つとも言える英語の)詩を損なうことない一句の長さとは、どの程度なのだろうか？・・・もしかしら、句の縮小や言葉の省略ということよりも、句と句が呼応して進むリズムの法則に関心を払うべきなのかもしれない。ハイクをいくつか読んでいて、ふとそのようなことを思いました。

ナオ2 聖母子像に類づくは誰 碧

(I wonder who is bowing

before the Virgin and Child)

英訳は椿紀子さんに試みて頂きました。有り難うございました。ナオ3の付、何句か頂いておりますが、次号で紹介します。

* 連句と酒 *

「だらだら酒」

今宮 水壺

コラムに酒の話を書けとのことですが、さて何を書けばよいやら。

参考にとこれまでの「ねこみの」を取り出して、杉亭先生、哲先生、志げ子先生の文を読んでみましたが、御三方それぞれ趣の違いはあってもいずれ劣らぬ「通」の酒、参りました。

酒は長いこと飲んできましたが、私のはただもう酒にいやしいというか、初めはちよつとのつもりが飲むほどに後を引く、だらだら酒とでも言ったらよいのでしょうか。

若い頃から酒の上の失敗も多々ありましたが、齢七十を過ぎて最近なんとか「もうちつと」「もう一軒」を抑えられるようになりました。酒の味もいくらか分かるようになりました。

銘酒の賞味云々はさておいて、今は一頃のようなまずい酒は無くなったように思います。有難い世の中です。

◇ 猫蓑会案内 ◇

○ 猫蓑同人会 場所 東郷神社・和楽殿

日時 六月十六日(水)

十一時〜五時半

○ 猫蓑会

場所 江東区芭蕉記念館

日時 七月二十一日正午

総会の後歌仙興行

○ 「猫蓑作品集 Ⅸ」が出来上がりました。

〒二七七 柏市加賀二一十二一十一

一〇〇五一 梅田利子 宛

◎ 次の方々は猫蓑会同人に推挙されました。

青木泉子 近藤守男 中野昌子



はなしの余白

橋 文子

落語の落ちには、地口落ち(鯉沢・大山詣り)、仕込み落ち(明烏)、考え落ち(蕎麦清)、途端落ち(寝床・愛宕山・百年目)、間抜け落ち(穴泥・風呂敷)などいろいろあるが、大抵の場合結末ははっきりしない。聞き手それぞれに任せで、余白を残して終わる。例えば「穴泥」では、穴庫に落ちた泥棒を捕まえたなら三両やると言うのと、「三両なら俺が上つていく」で終り、その後どうなったか迄言わない。落語は無駄な言葉は出来るだけ省き、簡潔な言葉に多くの効果をゆだねている。特に江戸落語は、言葉の選択を煮詰め、洗練させてきた。落語が江戸時代に興隆、確立したと、洗練された話芸であることとは切り離せない。江戸の人々の感性が、この話芸を育んだと思えるのだ。そして、落語にある余白は、発句の余意、余情と共通のものがある。五七五に凝縮された句の持つ世界の余情の大きさ、落語また然り、余白の語る部分が大きい。それに加えて、日本人の持つ季節感である。季節感は、日本人にとって共通の美意識である。四季のある国に生れ、四季の変化に身を置くことの出来る土地に育った人間の感受性は、俳句、短歌などの文芸や、

絵画、芸能などの芸術に影響している。連句

（巫が成り立つのも、この共通の美意識があるからであろうし、落語も決して無縁ではない。）

江戸の人々の一年は、様々な行事で彩られている。貧しい者は貧しいなりに、季節の風物を楽しんだのであろう。その風物詩が、洗練された「はなし」となり、更に演者によって磨きをかけられ今に伝えられている。「はなし」を四季にあてはめて並べてみると、それはまったく「季寄せ」の趣である。

演目だけをとりあげるのも、芸のない話だが、季語のように並べて、噺家の誰彼や、八つあん、熊さん、ご隠居を思い浮かべ、にんまりするのも、亦楽しからずや。

|| 春 ||

味噌蔵(田楽) 愛宕山(陽炎) 雛鉦(雛祭) 天王寺詣り(彼岸) 長屋の花見(花)

|| 夏 ||

酢豆腐(蕪) 鰻の幫間(鰻) 佃祭(佃祭) 船徳(四万六千日) 二十四孝(蚊)

|| 秋 ||

苺の火(盆) 馬のす(枝豆) 釜どろ(月) 唐茄子屋(南瓜) 目黒のさんま(秋刀魚)

|| 冬 ||

代り目(熱燗) 鯉沢(玉子酒) 狸賽(狸) 二番煎じ(夜番小屋) うどん屋(風邪)

|| 歳末 ||

|| 新年 || 睨み返し(大晦日) 千早振る(百人一首)

東 明雅

【Q】 連句人には、式目を簡素化したがる傾向と、厳しく意識する傾向と、両方あるようですが、芭蕉は連句の式目をどのように考えていたのでしょうか。

【A】 俳諧の式目は、元々連歌の式目をゆるやかにしたもので、当時最も権威があったのは松永貞徳（承応二年没）の「俳諧御傘」でしたが、芭蕉はこれを「信用しがたし」として用いず、梅翁（元禄二年没）の「俳諧無言抄」を「大様よろし」として推奨しました。これは「俳諧御傘」の項目を大幅に減らし、証句を揚げて簡素化した点がよろこばれたのであります。

また、門人の中には、いろいろ差合を解決する為に、蕉門独自の式目書を作つて欲しいと願う者もあったようですが、それらに対して、私に式目を作るなど甚だ慎しむべき事だということわり、差合のことは、その場、その場で適当に考えればよい事で、まずは大体の取扱いでよろしいと言つております（三冊子）。

この事は、去来も「先師は、一応は法式を用いられたが、それに拘泥されなかつた。何か考えがある時は古式を破られる事もあつた。しかし、自分勝手に破られる事は稀であつた」（去来抄）と述べている所と重なりあうところ

ろであります。

右のように、芭蕉は当時の俳諧の式目を信せず、従つてその権威も認めておりません。差合が起つた時は、その場、その場で自分で考えて処置しました。そのため、その解決が古式に合う場合もあり、合わぬ場合もあるのは当然ですが、合うのは偶然であり、決して芭蕉が古式に合わせようとしての結果ではありませんでした。

貞亨式海印録（安政六年自叙）の著者の原田曲斎が「よくよく考えてみるに、蕉門で専ら用いる式目は、春秋の句はそれぞれ五句去り、三句から五句まで続けてよい。夏冬の句はそれぞれ二句去りで、一句から三句まで続けてよい。花は一折に一つ、月は面に一つで、月と月との間は五句去りであるという外は、凡てその場その場の臨機応変の処置である」と言っている通り、芭蕉の作品には、たとえば一卷の中に恋の句のないもの、表六句の中に神祇・釈教・地名・人名などの出る巻、同字三句去りを守らぬ巻、発句に出た字を拳句にも再出した巻、素秋の禁を破つた巻など数えるに違がありません。

これらの現象をとらえて、芭蕉は式目を事實上、簡素化したと見るか、反つて後世の人にいろいろな迷を残す事になつたと見るか、これは皆さん、それぞれのご判断におまかせしたいと思います。

◇ 猫蓑発展基金ご協力有難うございます。

六口 天の川連句会

四口 原田千町

二万円 未来図連句会 (敬称略)

◇ 基金の口座 富士銀行新宿西口支店
普通3376045 猫蓑基金

— S — S —
あとがき

○ 「口笛吹けば猫が寄り来る」と文音が来た。「そうかなあ」と書いたら、「実は猫飼つたことないんです」と作者率直に白状された。ところが近頃拙宅の猫、口笛を吹いたら寄つて来た。飼主の連句歴と同じ十歳。十年経ると猫はネコマタとなり、人語も解するという。飼主はいまだ何者にも変身できないでいる。○ 胸のすくような花の句をと思つているが、今年も花には追いつけなかつた。しかし季節の主役は次々交代する。メゲてはいられない。

季刊 「ねこみの通信」第三十五号

発行者 猫蓑連句会

編集人 〒一九五 町田市金井6-7-16

100711 佛淵健悟

印刷所 アトリエ・ネコ